

文徵明《石湖清勝図巻》（1532）について —呉派文人画における名勝図の一様相

都甲さやか（九州大学大学院）

16世紀呉派文人画壇の中心人物としてしられる文徵明（1470–1559）は、90年に及ぶ生涯の大半を故郷の蘇州で過ごし、近隣の名勝をたびたび絵画化している。《石湖清勝図巻》（嘉靖11年【1532】、上海博物館蔵）は、蘇州の西南に位置し、太湖の一支湾をなす石湖の実景を題材とする。本図巻は、文徵明が3年にわたる北京任官（1523–26）を終えて帰郷し、本格的な書画活動を始める1530年代を代表する作例として位置づけられ、呉派文人画壇において流行した名勝図の一作例として絵画史上での意義がみいだされてきたが、詳細な分析は行われていない。本発表では、実地踏査の成果やその他の文徵明作品との比較、関連する文献史料の精読を通して、文徵明が故郷の石湖にいかなる態度で向きあい、それを《石湖清勝図巻》へと結実させているのかを明らかにする。

文徵明は、《石湖清勝図巻》を遡る12年前、《石湖花游曲詩画卷》（詩巻：正徳9年【1514】、画卷：正徳15年【1520】、上海博物館蔵）を制作している。これは、元の至正8年（1348）3月10日、顧瑛（1310–69）や楊維禎（1296–1370）をはじめとする玉山雅集のメンバーが石湖で游んだエピソードを題材とする作例で、画中のモチーフ、視点選択などにおいて、鑑賞者に往時の雅集を想起させる工夫が凝らされており、雅集図としての性格を内包する。これに対し《石湖清勝図巻》は、モチーフを必要最小限に留め、元末の黄公望（1269–1354）《富春山居図巻》（元・至正10年【1350】、台北故宮博物院蔵）の山水構成を踏襲することで、石湖の実景をより理想化された姿で表象している。その意味で本図巻は、過去の一つの出来事に収斂されない石湖にまつわるあらゆる文化的記憶を内包しうる、普遍的な表象となっている。

名勝をめぐる議論を精読すると、文徵明は当時、名勝が品格を高め世に広くしられるためには、その土地と結びついた文人の営為が不可欠であると認識していたことがわかる。文徵明の長子である文彭（1498–1573）もまた、亡き父を偲びつつ《石湖花游曲詩画卷》に附した後跋（嘉靖45年【1566】）において、「後の今を視るは、亦た猶ほ今の昔を視るがごとし」という王羲之「蘭亭序」（東晋・永和9年【353】）の一節を引用し、石湖をめぐる文人の営為が、人の世代を超えて連綿と重ねられてゆくことに、深い感慨を寄せている。

発表者は、上述の考察を通して、文徵明が一連の石湖図を制作するにあたって、人の世代を超えても変わることのない石湖と、それに対して有限の時を生きる人の営為との双方に意識を向けていたこと、またそのような意識を働かせることが、石湖図の鑑賞における不可欠な態度として文人の間で共有されていたこと、さらにこうした石湖を普遍的な名勝として表象することが、他でもない文徵明自身が、石湖をめぐる文人の系譜及び文人画家の系譜につらなることの確認、表明となっていたことを結論として述べる。